33

平成13年4月8日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（二九）

第三七則　潙山業識

〔示　衆〕

衆に示して云く、耕夫の牛を駆って鼻孔を拽廻し、飢人の食を奪って咽喉を把定む。還た毒手を下し得る者ありや。

〔本　則〕

挙す、潙山、仰山に問う、忽ち人あって、一切衆生は但だ業識茫茫たるのみにて本より拠るべきところなからんと問わば、子、作麼生か験さん（馬は是れ官馬、印を須いず）。仰云く、若し僧の来ることあらば、即ち召びて云わん、某甲と（脳後の一椎、来処を知らず）。僧、首を廻らさば（頂門上に三魂を去却す）、乃ち云わん、是れ甚麼ぞと（焙竈の熱を趂って更に一下を与う）。伊が擬議せんを待って（脚板底に七魄を鑽了す）、向って道わん、唯だ業識茫茫たるのみにはあらず、亦た乃ち本より拠るべきものなしと（生擒活捉す）。潙云く、善き哉（苦口より親言を出だす）。

今回は潙山・仰山父子の問答です。『従容録』百則の中で、最も多く採られている祖師は雲門の七則、つぎは釈尊の六則、これにつぐ五則の祖師は多く、趙州・潙山・仰山・洞山・法眼の五者。潙山も仰山も、この『明珠』では遅ればせながらの初登場となります。

潙山とは霊祐禅師（七七一～八五三）のこと。かの有名な百丈さんの法嗣で、大潙山（湖南省寧郷県）に道場を開き大いに禅風を掲げた唐代の禅哲です。例により潙山という山の名で呼ばれ、親しまれています。潙山は、その神足の仰山慧寂（八〇三～八八七）とともに、のちに潙仰宗という禅一派の開祖とされるほどの人物。こんな両名による問答商量が、この「潙山業識」の話。舞台は湖南省の省都長沙から西北西約一四〇キロ、今なお秘境の大潙山。

まず、例によって万松さんの〔示衆〕を意訳しましょう。

「農夫が大切に大切にしている牛を他人が手荒くこき使い、飢えている者の飯を奪い取ってのどをしめつける。いったいこんな辛辣な手段をふるって雲水を悟りに導く禅者が、この世にあるだろうか。」

こういったところです。「毒手」とは手きびしい扱いのこと。いうまでもなく、万松さんはこれほどの毒手を振えるのが仰山なのだと、その力量をほめ讃えているのです。

すると、つぎの〔本則〕こそは、この仰山による毒手のほどが示されているわけですね。これを意訳してみましょう。

　潙山が仰山に問うた。「誰かが来て、衆生はただ思慮分別をはてしなく起こすが、その拠り所はないのですかと聞いたら、あんたはこれをどう実地に教え示せるかな？」仰山「まず僧が来たとたんに名を喚びます。顔をあげたら、〈一体全体お前さんは何だね〉とたたみかける。そのとき口ごもったら、〈ただ思慮分別をはてしなく起すだけじゃあない、それさえも拠り所なんかないんだよ〉といってやります。」潙山「いやあ、すばらしい！」

　短い問答ですが、重要なテーマが問題にされています。それは「業識の拠り所」。これを潙山が間接的な表現で仰山にたずね、仰山の力量をテストしようとした。それに対して、仰山がじつにすばらしい実証的方法で答えた。それを潙山がほめ讃えたというわけです。

　「業識」とは、宿業としての妄心という意味。「茫茫」は限りないこと。凡夫は常に分別心を起し、それはまた新たな分別を生み際限ないさまをこういったのです。念想観の識量をやめるべき只管打坐のときでさえ、容赦なく浮かぶ雑念とのたたかいの己れを顧れば、これはよくわかりますね。そこで昔の熱心な求道者たちは、この業識の原因を究明した。拠り所を究めて、ここにメスを入れんとした。

　ところが仰山は、そんなものは「ない」といい、潙山もそれを肯った。つまり空なのです。業識もその拠り所も空。ふと擬議することが妄想だというのです。禅は常に分別が起る以前のナマの体験を重んじ、ナウな表現を尊ぶ世界。それが己れの本性だからです。そんな本性を会得させるため、禅匠たちはよく雲水の名を呼びます。

　潙山にも、こんな機縁が伝えられます。「潙山が院主を呼ぶ。院主が来るや、わしは院主を呼んだのにお前が来てどうするんだといった。院主はあっけにとられた。」また、首座を呼び、同じ扱いがなされています。弟子の仰山は、当然これを知っていた筈。知ってはいても、潙山から業識の拠り所をテストされ、即座に名を呼ぶ一連のしぐさで見事にそれを示したのが絶妙。それこそ擬議を発しない以前のはたらきでした。

　わたくしは昔、大学に入った年の夏休み、受業師さまのお寺ではじめて僧侶としての教えをいただきました。新潟県柏崎からバスで約三〇分、山間地の山寺でしたがお米とモズクのおいしさは格別でした。一と月後に帰途の夜行列車でウトウトした時、ヤミ米の一斉取締りにあいました。お土産にいただいた手籠が重いので通路側に置いてあったのを見とがめた警官が「これは米じゃないか？」「イヤ、全然ちがいます！」おかげで警官は調べもせず通り過ぎ。帰山後、籠を開けて仰天、あのおいしい新潟米がどっさりこ!!

　知らないからこそ平気で目につく通路に置き、警官の嫌疑に平然と否定できた。もし知っていたら、表情で相手に見抜かれていたはず。こう思うと、ヒヤ汗が流れました。それにつけても、擬議の起らぬ心のはたらきはすばらしいことよ。

現在の大潙山密印寺山門

　どうも、あまり良い例ではありませんが、この体験はわたしに妄念や擬議についての教訓となりました。一と月もお世話くだされ、その上に最高のお土産を持たせなさったご住職ご夫妻の温情が、わたしにとっては二重のお土産となったと気づき、その時以来、感謝しております。

　さて、仰山が妄念も擬議も拠り所がないというのを、万松は「生擒活捉」、つまり生け捕りだ、というコメントもまた絶妙。生け捕りなら殺活自在。それなのに、業識や擬議といった「殺」の側ばかり茫々とはたらかしているのがほかならぬわたしたちなのです。

　こうした反省のもとに、まだ今からでも大丈夫。どんどん良き体験を重ね、良い縁を結べば、より良き人生になること必定。特に道友の皆さん同志、ありがたい仏縁を大切にいたしましょう。

生死は仏の御命なり

―第一八回成道会―

平成一二年一二月三日、龍泉院本堂において恒例の成道会が実施されました。成道会はお釈迦様が悟りをお開きになられた聖なる日を讃える行事です。

一八回目と回を重ねて、会員の配役による法要も滞りなく進行。二炷の報恩坐禅のあと、法要、二度目となる問答応酬、その後、椎名老師による法話がありました。以下はそのダイジェストです。

お釈迦様がお悟りを開かれたのは、発菩提心、発心があったからです。その重大な契機はご自分の精神的な苦しみ、つまり生老病死の苦しみ。生老病死というのは、全てが死に直結し、誰でも恐ろしい。しかし眼をそむける事のできない厳然たる事実です。自分の四苦八苦を自らの目や心で見据えることによって仏法が開き、限りなくお釈迦様に近づきます。

それを自ら実行した人が乞食桃水です。正式な名前は桃水雲渓。慶長一〇年（一六〇五）頃、桃水は福岡県、柳川市の富裕な商家の子として生まれ、六歳で出家し、囲厳（いがん）さんに付いて修行。一五歳の時にもう断食などの苦行を始めた。

その頃、師の囲厳さんが修行僧に対して行った説法があります。

人間が一番捨て難いのは五欲です。色欲、食欲、睡眠欲は生理的な本能に近いもので、理性でコントロールできる。ところが名誉欲とか利欲は後天的なものなのに、本能的な欲よりも脱しにくい。出世や名前が知られたいという名利を一番戒めなくてはならないと諭された。

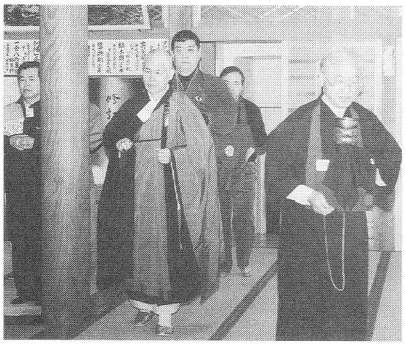
これに桃水さんは大きな刺激をうけ、そののち宗派を問わず高僧に歴参し、その人たちの素晴らしいものを吸収することに努めた。さらに中国からきた高僧・隠元の許で新しい黄檗の仏法を学ぶ。そして明暦三年、桃水さんは五〇歳をとうに過ぎて曹洞宗のお坊さんになった。その後、島原の禅林寺の住職として招かれ、二年経た解制（かいせい）安居（あんご）の日を最後に、桃水さんは悄然として姿を消してしまった。

やがて、お弟子さんが京都で乞食に混じって救済活動をしている桃水さんを発見する。率先して病気の乞食を介抱し、布施されたものを分け与えていた。弟子が寺に帰ってくれと懇願しても、頑として聞き入れない。そのまま京都から伊勢神宮・名古屋近郊で乞食をし、転々と一カ所に留まらないで生涯、下働きをしながら、恵まれない人の救済、供養を続けた。

最も虐げられた人々の中に仏法の場を見出すというのは、宗教の違いはあっても、マザー・テレサさんも同じです。テレサさんは末期状態の病人の中に神を見出されていた。祈りと労働というものは、人間の余計なものを全部取り払ったときの原点です。

生死は仏の御命（おんいのち）なり、と道元禅師はいっておられますが、正に生死という自分の生涯あるいは他人のしがらみの中に身を置き、自分の立場を重ね合わせて初めて仏の御命が現実のものになるのです。

法話の後の点心（昼食）はプロ



入堂される椎名老師

の出張サービスによる手打ちそばをいただきました。三町さんからは額に入れられた石仏の写真が一〇点、抽選で会員へ贈られました。またそのほか成道会に際し会員から数々の添菜を頂戴しました。有難うございました。

初めての成道会

流山市　二階堂雄一

平成一二年九月二四日の参禅会より参加させていただき、私にとって四回目の参禅会が、龍泉院参禅会の第一八回成道会でした。

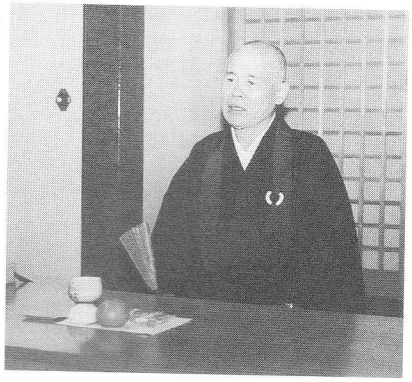
三度の月例参禅会に出席し「なるほど坐禅というのはこうやるのか」と自分なりに慣れ始めた頃で、お釈迦様が、菩提樹の下で悟られたことに由来して始まった成道会というものに、好奇心を覚えたと申し上げたら失礼になるかもしれませんが、とにかく楽しみに参加させていただきました。

実際に参加して感じた事を申しますと、月例参禅会と違い、坐禅、成道会、法話と全て、龍泉院本堂で行われた事が私にとって驚きでした。それまで坐禅中は、緊張と痛さで入堂してから退堂するまで、本堂内を見回す余裕も、そんな事を考える暇も有りませんでした。じっくり本堂内を観察でき、自分もこの本堂の一画に置いていただいているという気持が、本堂に対する親しみとなって感じてくるのでした。

そして本堂での椎名老師の「桃水雲渓」のお話には、心を洗われる思いを致しました。私にとっての成道会は、この桃水のお話に尽きるといった感があります。それまで「乞食桃水」という名は知っておりましたが、良寛のように研究書等がいっぱい出版されているわけでもなく、ちょっと変った禅僧くらいにしか思っていませんでした。この日以来、桃水に嵌まって、書籍を探しているのですが、残念ながら一冊の本にまとめられた「桃水」の本には、いまだ出会えません。

成道会は法話の後、場所を移して、点心、反省会となりました。その点心についてですが、粥座、点心、薬石の内の一食ですから、低カロリーで少量、味は二の次と修行僧の食事を想像していたのですが、私の想像とは逆でボリュームのあるおいしい「そば」には感激でした。

もう一つ驚かされたのは、参加された方々の〝食の太さ〟でした。私も良く食べる方ですが、そんな私でさえも腹が百パーセント近く満たされた量の食事をいとも簡単に、その後のお菓子ともども食べられたのには驚きでした。



この件で、二月の新年会の席で、武田さんから「私も最初同じように驚きましたが、食べる事も修行の一つ、成道会法要の流れの一つで…」というようなお話をして下され、「あっ、そうか」と悟らせていただきました。

それまでの参禅会もこの成道会でも「本堂に入り坐禅をし、その後提唱または法話を聞き、後はお菓子を食べ、お茶を飲み、または今回のように食事をし、雑談をして帰るだけ」と考えていた自分が恥ずかしくなりました。

食事を一所懸命作ってくれた人、お菓子を下さった方に感謝をしながらいただく、坐禅や法話を聞くことも、食事をいただくことと同じ、そのことを忘れていました。

同じようなことを弓道を始めた頃、道場で先生に教えていただいた事があります。射位（矢を射る位置）に立って「的中か外れか」考えているようではもう結果は見えている。「的中か外れか」は、入場する時、もっと前、弓道場に行こうと家を出る時、いやその前日の夜、寝る時に既に決まっている、と教えられた事があります。

道場で弓と矢を持った時ではもう遅い、普段の生活での心構え、稽古に対する姿勢が大切なのでしょう。ろくに稽古もせず、良い射を期待するのが間違い。満足に稽古をしないで試合や審査に臨み「まぐれで的中するのではないか」と当りもしない期待をするから、試合等であがったり、余計な緊張をして最悪の結果になる。

参禅会で学ぶ事も同様なのではないかと自分勝手な考えですが、思っています。現在、「行持」の巻、を受講中ですが、私が本堂に入堂してから参禅会が始まるのではなく、龍泉院参禅会に参加してみようと思った時から既に始まっているのでしょう。この御縁を大切にしたいと思います。

特別企画・安本氏へのインタビュー

歩き遍路、観音巡りと続けて

旅支度は写経から――

編集部　安本さんは今まで四国、西国、秩父、坂東と巡礼の旅をしてきましたが、始めた動機は何ですか。

安本　特にこれというのはないですが、『大法輪』に書かれていた俳句をみてね。「腰掛けし石に合掌遍路去る」というのがあって、これいいなと思って。かなり前、まだ勤めているときです。

牧野　歩き遍路にした理由は何ですか。

安　まあ、やっぱり歩くのが本来だから。それと、多少は信仰心があったのかな。ああいうところを巡ってみようと。そのつもりで、お経を書いていたから。

牧　何のお経を書いてらしたの。

安　般若心経も書いてたですが、四国に行くことになっても、そんなに手間はかからないだろうと。で、最初、観音経を書いたんですよ。観音経はそんなに簡単には書けない。数えたら二〇〇九文字ありましたから。でまあ、そっちをまず先に書こうかてんで、平成五年ぐらいから納経しようと思って書き出したんです。

編　納経帳というのは、それを納めてから書いてもらえるわけですね。

安　そうそう。本来はお経を納めて、確かに受け取りました、という意味で書いてくれるわけです。

牧　普通の方は、そうしないで、般若心経を唱えて、納経したことにするんですね。四国なら八十八カ所と高野山の分、八九枚を書いてもっていくわけですか。あれは楷書でしょ。

安　そう。私も最初は観音経も教本を見て、楷書で書いていたんですよ。大変でした。でもあとで小畑さんに頂いた、行書に近いような平安時代の写経を手本にしたら、ずいぶん楽になりました。

牧　その観音経を納経したんですか。

安　はい。一カ寺に一枚、二〇〇九文字を一〇一書いたから、二〇万字書いたことになりますね。

牧　わあー、すごい。じゃあ出かける前も大変でしたね。

安　ええ。一巻書くのに八時間かかりましたがね。

牧　ええっー。八時間。じゃ、準備だけで大分かかりましたでしょ。

安　五年ぐらいでしょうか。定年までに九一巻まで書いて、あとは定年後に十巻で一〇一。全部で百観音ですが、最後は長野の善光寺に納めます。

牧　禅を学んでいる安本さんは、他宗の寺を巡ることに抵抗、違和感はなかったんですか。

安　なかったですね。朝起きて坐禅をして、お経を読んで、前の日のことを日記に書き込んで、それから食事をして、六時には宿をでる、そういう生活をずっと続けてきたから俗世間から離れたといえば、離れた。それを四〇日とか五〇日続けている。純然たる禅の修行ではないかもしれないけど、体を使って歩いていくというのは、修行になりますね。疲れていても歩かなくては先に進まないわけですから。まめができても。

編　最初に行かれたところが四国でしたね。初めての人はお接待に感激されるそうですが、行かれる前にご存知でしたか。

安　ええ。ガイドブックに書いてありましたから。あれはびっくりしましたね、最初。始めの頃ですが、軽のワゴン車がスゥと寄ってきて止まるんです。六〇才位の農家のおばさんが降りてきて、裸で失礼ですけど接待させてもらいます、って千円出すんです。最初もらっていいのかなあと思いました。接待といったって金ばかりじゃありませんからね。歩いているとどんどんくれるんですよ。

牧　どんなものを？

安　みかん。自分のところでつくったみかん。二キロも。重いですよ、二キロというと。…百グラムでも荷物は軽いほうがいいのに。

牧　本当に相手のことを考えたら、荷物になってはいけないから、一つか二つぐらいにしたらいいのにね。

編　いろんな本に書いてあるんですが、自分の代わりに歩いてくれているという気持ちが強くて、たくさんくれるんでしょう。

安　あっ、そういう風にはっきり言う人もいました。おばあさんでね、ポチ袋に百円玉をいれて、いっぱい持っているんですよ。歩いている人を見たら、私はもう年で歩けないから、代わりに歩いてもらってるんだから、ど

うぞ何かに使ってください、って。

牧　時間とお金と体力がある人でなきゃ遍路はできませんものね。

安　確かにお金はかかりますね。四国の旅費は四七万円でした。野宿をしないかぎり、歩き遍路はお金がかかります。

坂東はきつい！

編　坂東は四国と状況が違うようですね。

安　坂東は関東一円ですね。坂東だけは順番に歩いたらだめなんです。順番に並んでいませんから。

牧　どこから歩き始めたんですか。

安　埼玉県の岩槻、慈恩寺から始めたんです。家から近いですし。この関東の地図を持っていきました。一番が鎌倉から始まるんです。源氏の観音信仰の篤いところです。

編　四国の八十八カ所というのは、たくさん資料がありますが、坂東はどうなんですか。

安　坂東は歩いた記録がなかなかないですね。車で行く資料ばかりですね。歩く人はたまに見るぐらいですね。白装束ですから、富士登山ですかなんていわれてね。

牧　地図をみると、ずいぶん広い範囲ですね。

安　坂東が一番距離があるみたいですよ。三三〇里って書いてありました。一三二〇キロですね。四国より短いと思ったらとんでもない。昔の歩き道での話。例えば日光のいろは坂は今はぐにゃぐにゃしてますが、昔の道はすっーと上がった。

編　日光とか筑波山にもあるんですね。

安　日光が百観音と四国のなかで一番標高の高い所にあります。中禅寺湖のほとりですから、一二七〇メートル。最北は八溝山ですが、ここが一番大変でしたね。

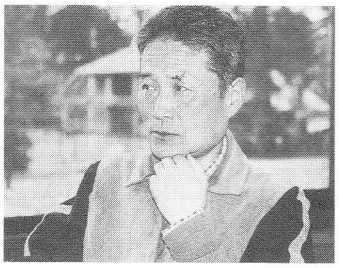
牧　四国から帰られて、また観音経を書き溜めたんですか。

安　ええ、既に九一巻書いてありましたから。後は書き足して。

観音様のご利益

牧　観音巡りをする人は、現世の利益をお祈りして周る人が多いですよね。安本さんは何を祈ったのですか。

安　特にありません。ただご利益といえるようなこともありましたよ。八溝山に向かっていたとき、近道の地図をかいてもらい、三分の一ぐらいの時間でつきました。寺につく直前、下りてくる車が停まったんです。中に寺のご住職が乗っていて、私に声をかけてくれたんです。事情を話したら、寺まで戻ってくれて、納経帳に書いてくれたんです。あのとき数秒でもすれ違っていたら、せっかく寺についてもご朱印はもらえなかったですよ。それから売店で腹ごしらえして出発したのが五時近くでした。秋ですからもう暗くなりだしてましたね。下りも車道だと三倍の道のりになるから、来た林道を下ったんですよ。始めは月明かりで道も見えていたんですが、杉林に入ったら真っ暗で道が分からなくなった。谷の水音を頼りに急斜面を下ったんです。木の枝をつかみながら。そのうち大きな窪みにはまってひっくり返ったんです。後頭をしたたか打ちました。そのはずみに杖を投げ出してしまい、探したけれど真っ暗でみつからない。何も持たずに、大きな道に出たけど真っ暗で何も見えない。やっと舗装道路に出たので、ほっとしたところへ、上から車が下りてきて、手を挙げたら停まってくれた。やれやれと思ったら、それが予約した宿の車だったんですね。心配しておかみさんと娘さんが来てくれたんですね。まさか林道を下りているとは思わなかったって。それもちょっとすれ違ったらもうだめでしたね。



牧　車道を歩くしかなかった。

安　ええ。これはもう十時になんかとても着けないですね。その三つが重なりましたからね。それが観音さんの御利益ですといえば言えますね。それで翌日、ガソリン代を払って、戻ったら、簡単に荷物がみつかりました。

心を観る

編　以前、四国の話を書いてもらいましたが、そのなかで、自分の心の内面を振り返る場面がありますが、坂東でもそうでしたか。

安　ありましたね。

編　そういうことに気がつくというのは、安本さんが唯識をやっていたからでしょうね。

安　それはあると思いますね。自分の過去に行った、仏教では業といいますが、これは歴然として誤魔化せないんですよね。必ず自分の第八識の中に熏習されていると。それが一人で歩いていると出てくるんですよ。坐禅を

している時と同じで、無心で歩くというのはできないから、やっぱり、いろんな妄想が出てくるんですね。

牧　安本さんは唯識をいつから勉強されてるんですか。

安　三〇代かな。薬師寺の話をきいたのが最初だから。あそこは唯識のお寺でしょ。橋本凝胤さんの小さな本を読んだのが発端でした。

牧　安本さんが観音巡りするのは何ですか。

安　最初は観音さんの正体は何だろう、と追求してみようとしたんだけどね。・・・でも結局は自分なんですよ。自分が観音さんの眼を持って見れば、木だろうがすれ違う人だろうが、みんな観音さんになるんですよね。やっぱり最後は自分のところに帰ってくるから、やっぱり唯識だな。

あの世は、あるの？――――

牧　だけどお釈迦様は死んだ後のことは分からない、わからないことを考えてもしようがないと、死後のことはおっしゃらなかった。

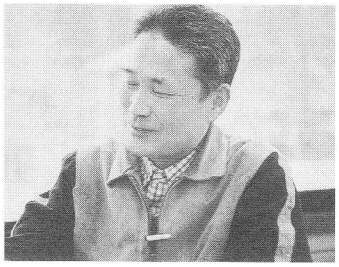
安　そういうことをいう人は多いんだけど、唯識の出てきた始まりというのは、お釈迦さんに死んだらどうなりますかという質問をした弟子がいた。そしたら、業だけ残って続くと言われた。それが古いお経に出ているらしくて。諸行無常で、すべてのものが移り変わっていくのに業はどこに残っていくのか、というのが疑問になってね、追求していったら、結局、第八阿頼耶識に残っていくと初めて答がでた。

牧　ということは、死によって肉体は消滅するけれど、魂は残る。

安　魂というのとはちょっと違う。自分の行った行いが第八識という心の深いところに種子として植え付けられるわけです。それが生まれたり死んだりして続いていくわけね。

牧　死んでこの世に戻ってきた人はいないんだから、死後のことは分からないというのが普通ですよね。

安　それがね、普通の考え方ではそうなんだけど、修行して心が清らかになった人と、中有にある人はそれが見えるといいますね。中有というのは死んでから次に生まれ変わる間に、普通これを四九日と言っていますよね。七日毎に生まれ変わる機会がくるわけね。



牧　何に生まれ変わるんですか。

安　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、それと天、の六道を経巡るというのがあそこでしょ。

牧　生まれ変わりが分かるんですか。

安　修行した人には見える。お釈迦さんも当然見えたわけですね。人間に生まれ変われたのはよっぽど運がいい。でも自分の欲に振り回されて行った行為が多いから、あまりいい種子を植えていませんがね。

牧　人間に生まれたことがものすごく希有で幸運なことで、立派な人だったら人間に生まれ変わるわけでしょ。じゃあ、なんでこんなに悪人が多いのでしょうね（笑）。

旅の経験は生かせるか――――

編　非日常的な旅で得てきたものを日常生活に生かせることはありますか。

安　ありますが、それは悟りじゃないから長続きはしないですね（笑）。気づきはありますがね。旅の後、二ケ月くらいは気持ちが動揺しなかったですね。気持ちが少しさめたかなと。わざとそういうことをしてみたことがある。

牧　わざとというと、どんなこと？

安　例えば、春に四国行ったでしょ。山桜は咲いてるし。きれいだなあ、と引っ張られるんだけど、ちょっと待てよ、と。きれいという感情を取ったらどうなんだ、桜という言葉をとったらどうなんだとかね。そうすると、気持ちがどんどん澄んできて、桜だろうが、他の木だろうが川だろうが、違いはあるけれど何かあまり変わらない。だから坐禅をしている気持ちに近いかな、と。するとだんだん気持ちが動かなくなるというのか。だけど、日がたって普段の生活が優勢になってきますね。…まあ、欲に振り回されて生きている生活に比べれば、坐禅だって、歩くのだって、要するに修行というのは非日常的なものですよね。

牧　起きたときから寝るまで、日常をきちんと生きること自体が修行であると、ご老師は日頃いわれてますね。

安　それは間違いないですが、いきなりその心境になれるかというと凡人にはむずかしいのかも。

編　日常に埋没してしまって、わかんなくなった時にふっと出ていける場があるというのは、有難いと思いますが。

安　逃避という人もいますが、そうじゃないですね。自分でやろうと思ってやった事なので。でも今考えてみると、よくあんなことやったな、と思いますよ。

唯識が教えるもの

牧　唯識を勉強してきて、常に自分の心を唯識論に当てはめて考えられるわけですか。

安　だから当てはめると言うのが、またいけないわけね。そこも取っちゃって、それが道元禅師のいう禅でしょうが、もう考えることも取る。道元禅師はただ坐れといわれるけども、ただ坐っていること自体が唯識の修行に適っているな、とは思いますね。唯識ではまず現在の悪い行いを抑えろ、現行を伏せといいますね。だから、腹がたったら、とりあえず怒るなと、抑えろと。どうして抑えろというかというと、またその種を第八識に熏習する。そしたら、また同じ縁がきたら、怒る人はますます怒ることになる。

牧　八識を最初の一識から教えていただけますか。

安　眼、耳、鼻、舌、身、意そのほかに第七が末那識、第八が阿頼耶識ですね。これが八識。これが心の主体ですね。主体が働く時は必ずそれに付随したものも働く。

牧　唯識というのは、禅では聞かないですね。

安　うーん。禅よりもっと古いです。大乗仏教ですがね。第七と第八は普段は分からないですね。第七識が曲者でね。必ず濁っているんです。外を見ない心なんですね。第八識だけを見ている。これが自分だ自分だって。第七識は四つの煩悩が付いてるもんだから、どうしても自分の都合のいいように見てるわけね。第八識は自分の正体ですね。命といってもいいかな。五感というのが割とごまかしが効かなくてね。五感のあとすぐに第六識が働くんだけどね。何を見ても五感まではまだ無色透明なんですね。本物、まだ実体がある。七識になって自分のためになるかと分別して、おかしくなる。自分の価値観とか文化が入ってくると煩悩になってきますからね。また物に対する執着、こちらが根深いわけです。第八識というのは自分から出ていったものを自分で見ている。それが種子、今までの自分の行為の残滓が生まれたり死んだりしてずっと続くわけね。

　そういうものを相手にして歩いているから余計に自分の正体が見えてくるのかもしれませんね。自分をみるというのが修行といえば修行ですかね。卑しい気持ちとか思ってもみない気持ちがでてくる。

牧　仏道を習うとは自己を習うなり、自己を習うというは自己を忘るるなり、というのと、常に阿頼耶識を意識して自分の正体を見ようというのは矛盾しないんですか。

安　それはね、追求していくと第八阿頼耶識自体が常に動いているんですよね。生まれたり死んだり、結局無我なんです。そこまで追求してくと、要するに自分とはないんだと分かるわけでしょ。どうしてここにいるのか、これは夢だとね。この世は夢だと、空の説明にも出てきますよね。

牧　坐禅のとき何も考えるな、といいますが旅にでても空の状態になれれば一番いいんでしょうね。

安　まあ、歩行禅というのと同じになれれば一番いいのでしょうが、そこまでいければね。…巡礼とか遍路はやっていること自体が悪いことじゃないでしょ。そうすると、会う人もそういう眼で見てくれるから、いいことしているんだと気分いいわけでね。

牧　私は歩き遍路なんだという気持ちは、おごりじゃないですか。

安　それがしょっ中でてくるんです（笑）。

牧　そして接待する方もご利益があるんじゃないかと、なにか俗人と俗人のやりとりみたいだけど、有難いですね。…坂東はお接待が少なかったのでは。

安　少ないけど、あったですね。お金をいただいたり。物はずいぶんありました。接待ということを意識してやらないことが坂東の特徴なんだけど。要するに根っから親切なんですね。お茶をふるまわれたりご飯をどうかなんて素朴な人情がありますね。それが西国にいくと洗練された感じですし、人当たりがやわらかくて親切なんですよ。西日本の旅館にはお見送りというのがありますね。子供まで出てきて見送ってくれるんですよ。坂東なんかは、お世話になりました、なんていうと家の奥で、はあい、なんて返事するんです。

牧　見送られたら気持ちいいでしょうね。

安　そりゃ、気持ちいいですよ。それと、西国は昔の習慣が残っているんですね。昔は伊吹山まで京都から送っていったのもありましたからね。昔の人は丁寧だったんですね。

牧　貴重なお話をありがとうございました。

病中記

我孫子市　三浦　輝行

昨年の初冬「喉頭癌」を患い、柏・国立がんセンターに入院し、二ケ月程の病床を体験しました。

元来、健康だけが取柄の身で、幼い頃より風邪、腹痛の他、病気とは凡そ縁遠く、入院などは全くの初体験だけにあたかも遠足気分。いよいよ身を預ける二日前には知己の輩も集い「癌、どこ吹く風」とばかりに飲めや唄えの大宴会。

然し、いざ入院してみると環境の激変に狼狽えるばかりで、只々、院内を歩き回る始末。

病室からは北に筑波の山嶺を、西に富士の麗姿を仰ぎ、朝な夕なの眺望は一寸した心の休息感。

早朝六時に目醒め、夜九時には就寝の自律生活ですが、冬の最中だけに朝は未だ闇の中で、街路灯が寒々と映るばかり。

洗面も済ませ、朝刊を手にする頃には陽が射し、誰が見ていようと見ていまいと自然界は正しくはたらきを始め、鳥達が舞う。

長患いになると思い、これを機に読破を、と持参した「正法眼蔵」に幾度か挑むものの、行間は一向に進まず、遂に脇に積まれたままで古仏の嘆きが聴こえるよう。

さて三日を挟み、いよいよ手術の日が迫ってきました。前夜、家族同席の下、主治医より病状の詳細、手術方法等についての説明があり、否が応でも気分は「俎板の上の鯉」に近付きます。

こうして長い病院生活が始まり、その後、二ケ月余りの日々を過ごす訳ですが、日を追うにつれ、病人である自分が僅かずつですが実感されてきます。

手術後二週目、窓外には師走の寒風が吹き、枯葉の踊る頃、見舞いの旧友と談話に興じ、ほぼ末期に近い状態だったとはいえ、声帯が残ったことに滂沱落涙の想い。

しかし、食事は未だ鼻を経由する流動食で味も何も解りません。

「何か欲しいものはないか…」と聞かれ、「何も要らない。唯一杯の水が飲みたい」と応え、初めて飲食の有難さが痛感されました。

歳の瀬も押し迫ったある日、正月を自宅で過ごす外出許可手続きを済ませ、大晦日に念願の帰宅。身を切る様な寒風の中にも隣接の林から土の匂いが漂い、犬の啼声一つ。久々の外気は一瞬にして記憶を戻してくれます。

ほんの一息の三日間を満喫し、嫌がる躰をなだめつつ病院に戻れば静寂の中、玄関飾りが目立つ。

炎天の盛夏には、その兆しすら感じず、大いに酒肴を愉しんでいたにも拘らず、秋風の立つ頃には何やら喉の奥に不調を覚え、僅か二ケ月で手術を受ける程に成り、病状の急速な進行は幕間もなく、事態を運び、思わぬ大病の体験と成った次第です。

もちろん、発病自体は長らく貯め込んで来たストレスと、無理を続けた日々、そして過度の喫煙による、いわば自業自得の果て。

機能失態に近い状況にまで滑降し、あわやという其の時、大いなる救いの手が差し伸べられたことを胸の奥深く刻まれたのは、手術後一週間程経ったある日の早朝。いつものように暁天を仰ぎ見る中、一瞬「護られている…」と体中に光感が走り、言の葉にも乗らない有難さを識り、窓に伏して感涙を溢れさせて居ました。

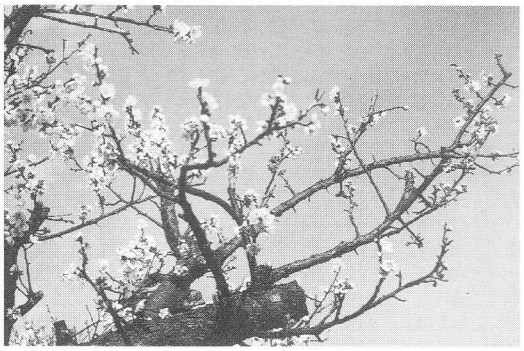
退院から約二ケ月を経た今日、まだまだ無理はできないものの、体調は確かに快方に向っており、「生命」を強く学ぶ毎日です。護られたことへの答は未だ出ず、生涯不明かも知れません。ただ、これだけは言えるようです。

――まだ為すべきことがある――それが何であるのか、何時まで続くのか、皆目判りません。多分、そのような分別は論外無用なのでしょう。

「今、此処にいる自分」

それだけです。

有難く、ただ有難く。



恒例「歳末助け合い」で募金活動をされる椎名老師

柏市　杉浦上太郎

雲一つない真っ青な空の下に、「歳末助け合い・曹洞宗」と墨書された白い幟が翻っていました。

平成一二年一二月一六日、午後一時から三時まで、柏駅東口コンコ

スにて、恒例の千葉県宗門募金活動が行われました。

椎名老師は、毎年参加されておられますが、今年も例年どおり網代笠・手甲脚絆・足袋はだしの托鉢姿で、募金活動をされておられました。

尊いお姿に、思わず合掌せずにはおられませんでした。

言行一致の仏道修行の姿勢をお示しくださっていると存じ、私は思わず、なかなかそうなり得ない自己の日常を恥じ、再び修行一徹を静かに誓ったものでした。合掌

不思議な体験

流山市　中嶌　宏誠

私が龍泉院に伺ってから、三度、不思議な体験をしました。

最初は、平成四年二月に木更津の真如寺で行われた、曹洞宗青年会「摂心会」の時のことです。まだ残雪があり寒さの厳しい時期でした。前の年に椎名老師様から、在家得度の際に頂戴しました、絡子を着け、僧侶の中で緊張しながら坐っていた時のことです。

二泊三日の最終日のことです。何炷目でしたか、経行に入ろうと立ち、歩を一、二歩進めた時のことです。身体が浮いて足が床についていないような感じで、堂内がシネラマのように写りました。意識はあるものの、何処に向うのかコントロールが出来ないような気がしましたが、僅かな時間で落ち着き、坐禅を続けました。

二度目は、平成一〇年四月「中国仏蹟を巡る旅」の五日目に登封県少林寺で椎名老師様の読経に合わせて全員で「般若心経」を唱えていた時のことです。

読経の途中で息継ぎをすると、頭の天辺から肩にかけてジーンとしびれを感じました。再度意識しましたが、現象が続いていました。初祖達磨大師様を参拝させて戴いた時に、このような不思議な体験をしました。

三度目は今年三月、八千代市米本の長福寺で行われた、曹洞宗青年会の摂心会でのことです。

初日の最終坐、六炷目のことですが、放禅鐘が鳴り、合掌、左右揺身して身体を廻し、単を降りようとした時のことです。

今まで何でもなかった身体が急にブルブル震えだし、やっとの思いで単の下にあるスリッパを引っかけました。下顎を押さえ、身を屈めるようにして、坐禅堂から本堂を抜け部屋に戻りました。その後も暫く震えが止まりませんでした。

体調も悪くなかったのに、何故あのような現象が起きたのか不思議です。それでも二日間の坐禅で凝っていた首と背筋がほぐれ、心身爽快になり我が家にむかいました。

何れも、静寂な所で起きた現象を〝有難くお受け〟している次第です。

合掌

同事

柏市　五十嵐嗣郎

先日、参禅会のS氏と今年のGWに計画しているシルクロードへの旅について、銀座で軽くビールを飲みながら打ち合わせを行っての帰宅途中、あるおぞましい体験をしたのです。

常磐線の車中でS氏と上機嫌で話し合っている時、我々の前の席に座っていた六〇代後半ぐらいの男性が、私たちの話の間に割り込んで来たのです。彼もややお酒が入っているようで、傍から見ていた人には、酔っ払い同士がたわいのない事を話し合っているように見えたのではないかと思います。

見ず知らずの酔払いのイチャモンに対して、はじめは真面目に取り合わないでいたのです。こちらは二人ですから、何が起こっても大丈夫という安心感も手伝って、適当に相槌を打っていたのですが、S氏が柏駅で下車された途端、やや不安になり、相手を怒らせない程度に話を聞く態度に変えました。その時ふと菩提薩多四摂法の中の同事という言葉が浮かんできたのです。相手の酔払いが何を言っているのかよく判らないなら、自分を相手の気持ちに合わせていけば判るのではないかと思ったのです。

そこで「この酔払いは一体何を言いたいのか?」という気持ちではなく、「この人はこんな事を私に伝えたいのではなかろうか」という気持ちで聞いていると、それなりに相手の話を理解できるようになって来ました。

即ち自をして佗に同ぜしめた結果、酔払い老人（同時に私も酔払いの仲間なのですが）が私に言いたいことは「人間は自分の欲望を満たすためだけに生きているんだ」という彼の人生哲学だったのです。

そこで私は「それは人間の生き方の問題ですね」と問い掛けると、彼は「そうだ」と答えたのです。《シメタ。話題が宗教的なテーマなら、このしつこい老人を丸め込める》と思ったのです。即ち問答で佗をして自に同ぜしめようと思ったのです。

「人間は元々物欲を満たす自己中心的なものだ」と私に得々と語る老人に、「それでは新大久保の事件はどう思いますか」と尋ねたところ、彼は急に黙ってしまったのです。更に二の矢を放つべく、「人間は他人のために働く所にも、生甲斐を見つけるのではないでしょうか」と、彼の肩に手を掛けながらやさしく語りかけたのです。

その時電車は我孫子駅に到着したので、降りようとしたところ、彼も立ち上がり下車したのです。ホームの階段を上がる時にも、彼の肩に手を掛けながら、韓国の留学生の文字通り献身的な行為を引き合いに、自分を無にして他人に尽くす事がいかに貴い事で、我々にはなかなか出来ないことなのだと、説教気味に語りかけていたのです。

改札口に差し掛かり、ばつ悪そうに急ぎ足で去って行く彼の後姿を見つめながら、彼の老人も私の考え方に賛同せざるを得なかったのだろうと、小さな満足感に満たされていました。

ところが翌日、朝のお勤めで修證義の第四章發願利生を諷誦していて、同事の箇所に差し掛かり、びっくりしたのです。

『同事といふは不違なり……、佗をして自に同ぜしめて後に自をして佗に同ぜしむる道理あるべし』

まず「佗をして自に同ぜしめて」それから「自をして佗に同ぜしむる」にならなければならないのです。昨晩の結果は全くこれとは逆ではないか！　それまで密かに持っていた満足感が一遍に吹っ飛んでしまうと共に、これは難しいことだと改めて思いました。即ち、最後は自分が彼の老人と同一化を図るなどは、とても私には出来そうに思えないのです。

所詮私は知ったかぶりした、鼻持ちならない、おぞましい小人だと、この時ほど感じたことはありませんでした。それと共に、仏の道は易く見えながら実際は難しく奥が深いことを、痛いほど悟らされた次第です。

彼の老人はひょっとしたら文殊菩薩さまだったのかな……。

盛りだくさんの新年会

平成一三年二月四日、柏駅に近い芳野屋において、当参禅会の新年会が催されました。

当初、会員有志の小さな集まりから始まった新年会でした。「明珠」の記録によると、平成三年より多くの道友に呼びかけ、年中行事となったものです。

本年は、ご老師はじめ道友二〇名が出席され、予定時間を大幅に超える楽しい宴を持てました。

今年が参禅会発足三〇周年ということもあって、参禅会創生期の様子をご老師が披露され、茅葺の本堂で坐禅された小畑さんは当時の思い出を懐しく話されていました。本堂の壁際から入るすきま風、鼠が廊下をちょろちょろしていた様子など、今では想像できません。

春早々、福がきた

お寺では、もちろんお酒は禁じられていますので、会員同士が赤い顔して大声で話す姿を目にしません。年に一度、酔いしれて大笑いしてもよいこの機会は、普段では聞かれない話や在家で仏道を歩む者のそれなりの苦悩、大変さが伝わり、大いに共感、共鳴するものがあります。席上、椎名老師から福茶碗の贈り物があり、くじ引きで三名の方が当たり、大切に頂いていきました。

新年度の幹事さんの初仕事でもあります新年会。進行役の安本さん、五十嵐さんにはお世話になりました。有難うございました。

《三〇周年記念行事のご案内》

祖蹟参拝研修の旅

当参禅会三〇周年記念行事の一環として、二泊三日で北陸地方の曹洞宗の祖蹟を巡拝し、参禅研修する旅を企画しました。

北陸地区には道元禅師が開山された大本山永平寺をはじめ、螢山禅師が開山された永光寺・総持寺祖院や、曹洞専門道場として有名な宝慶寺・大乗寺があります。

今回は祖蹟巡拝と共に、雲水の修行道場である宝慶寺での一泊参禅、および大乗寺での一炷参禅、さらに椎名老師からお祖師に関わるご提唱を頂く予定です。お祖師様方の行履を慕い、大恩に報いるべく、北陸の古刹でじっくり坐りたいと思います。皆様の参加をお待ちしております。

期間　六月二九日(金)～七月一日
　　東京駅集合、上野駅解散
費用　六万円（概算）
参加申し込み締切りは五月二七日
　詳細は、年番幹事の安本、五十嵐までお問い合わせください。

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）　四月は八時半より坐禅作法指導
一、**坐　禅**　第一炷　口宣、坐禅三〇分
　　経　行　一〇分
　　第二炷　坐禅三〇分
一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。一月より「行持」上巻
一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
一、**参加資格**　年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます
一、**会　費**　無料
一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月二日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする
一、**一泊参禅会**　本年は六月二九日より二泊三日の祖蹟参拝

― 沼南雑記 ―

参禅会記録（　）中は座談の司会者

平成一二年

●一〇月二二日　二四名
　（添田　昌弘氏）
●一一月二六日　二八名
　（松井　隆氏）
●一二月三日
　第一八回成道会　三二名
　導　師　椎名宏雄老師
　総幹事　小畑　節朗氏
●一二月二四日　二五名
　（美川　恒子氏）
　龍泉院スス払い

平成一三年

●一月二八日　一四名
　（阿部　史子氏）
●二月四日
　新年会　二〇名　於・芳野屋
●二月二五日　二六名
　（宮本　茂氏）
●三月二五日　三四名
　（永野　昭治氏）

▼安本氏へのインタビュー。編集長がテープ起こしたものを四分の一に短縮。内容は盛りだくさんだったのに紙面の都合で残念。未熟で失礼なインタビュアーに安本さんよく話してくださいました。有難うございました。（吾亦紅）

▼前年度の年番幹事、杉浦上太郎氏と武田博志氏のお世話になりました。今年度は安本小太郎氏と五十嵐嗣郎氏が担当します。どうぞよろしくお願いいたします。

▼御老師の提唱「正法眼蔵行持」いまの華開葉落これ行持の見成、落椿も脱落身心、是一顆明珠。

　落椿まだ薮を出ぬ魂ひとつ
　　―海道―

大悟却迷仏祖の行持、ありがたし。

▼三月参禅会、沼南の里にも、春の突然の足音に驚くように、紅椿が二輪落ちている。坐禅する者には、その音が生滅滅已、寂滅為楽と轟いているようだ。散る散る常住、咲く咲く常住とか。（守雲）

▼パソコン使っていて、思った。全ての命令をきくわけでなく、勝手にストライキ。人の作るものフアジーと無常と死を内蔵してる。

▼「明珠」春号は梅の花開くころ原稿の集まり具合に気をもみ、桜の便りの聞かれる頃、割付、印刷所へ入稿、初校と慌しい。今春は早々と会員から原稿が寄せられ、花見に行けた。真にありがたい。

▼当参禅会の新年会は、他所で開かれる宴とは一寸趣が違う。日ごろ聞かれない面白い話が続出。これほどためになる新年会、他では無い。欠席された方は来年をお楽しみに。（佇泉）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116―45　☎0471(43)3131